

## 森の贈り物 (2)

『リンバロストの乙女』を中心に

青 嶋 由美子

### (2) 出会いから結婚へ

夏、ジャネヴウは、ローム・シティ<sup>1)</sup>に住む姉のフローレンスを訪ねた。前年の転倒事故で受けた損傷は、可成の部分治癒していたが、まだ、杖は必要であったし、サングラスも時には、かけねばならなかった。しかし、それにもかかわらず、ジャネヴウの姿は人目をひく魅力的なものであった。治療のため刈り上げられた髪は、結わえられる程に伸びていた。その当時、一般的であったものより短い杖の黒い服を身につけ、肩口か、喉元には、アキノキリンソウや、「黒い瞳のソーザン」という異名を持つデイジイのコサージュを飾っていた。

ジャネヴウと、後に彼女の夫となるチャールズ・ダーウィン・ポーター (Charles Darwin Porter) との出会いの街であったローム・シティは、シルバン湖畔にある。シャトーカ方式<sup>2)</sup> 夏期大学の場として、講演会や音楽会、歌唱の夕べといった娯楽を提供していた。湖の中程にある夏期大学用の建物は、陸地とを結ぶ美しい橋に繋がっており、静けさと満々たる深い美しさを湛えた湖と、エメラルド・グリーン<sup>3)</sup>の海岸線は、素晴らしい背景を形作っていた。そこには、人々が大勢集まり、ホテルに収容されきれない人々が、テント村

に宿泊する位に盛況を呈する地であった。

1894年夏、ジャネヴウは、親友コーラ・ウィルキンソンと、その家族と共に、ウィルキンソン家の湖畔の別荘で過ごしていた。今までに見てきたように、自然の中での生活を好むジャネヴウにとって、この湖畔での日々は、冬の事故を忘れさせるのに、十分な楽しみを提供してくれた。彼女はコーラと一緒に、ボートを漕いだり、泳いだり、魚釣りをしたりと、夏にふさわしい戸外での娯楽を満喫した。湖の向う岸までボートで行き、黄色と白色の美しい睡蓮を集めたり、突き出した小枝の藪に蔽われた水面下に潜む鱸を釣り上げたりと、お弁当を持って、早朝ボートを漕ぎだすと、暗くなるまで戻ってこない日が、何日も続いたりした。

インディアナ州ジニーヴァ (Geneva, Indiana)<sup>3)</sup> 出身の若きドラッグストア経営者であるチャールズが、ジャネヴウを見初めたのは、この時であった。チャールズは、従兄ウィル・ウィンチ (Will Winch) 達と四人のグループでこの地を訪れていたのであった。チャールズは、ジャネヴウへの想いを仲間に打ち明けたが、自分から、積極的な行動をとることが出来ず、見かねたウィルが、彼女の素性を聞き出しに動いた。好意を告げる機会

- 1) インディアナ州ノーブル・カウンティ (Noble County) にある避暑地。ジャネヴウの兄アーヴィンが住んでいたフォート・ウェインから、北北西に約 35 マイル程離れた地である。
- 2) Chautauqua, ニュー・ヨーク州のシャトーカ湖畔で開かれた成人教育講座 (シャトーカ夏期学校, 1874 年～) から発生した方式の講座。民主化のためには、知識の普及が必要だという宗教的信念により、オハイオ州のルイス・ミラー (Lewis Miller) と、ジョン・ヴィンセント (John H. Vincent) による野外集会から発展していった。
- 3) インディアナ州アダムス・カウンティ (Adams County) にある町。フォート・ウェインからは、南南東に約 45 マイル離れている。ジャネヴウの故郷であるウォバッシュを流れるウォバッシュ川は、ハンティントン湖 (Huntington Lake) を通り、このジニーヴァの町へと至っている。

がないままローム・シティを去る時、彼らは、フォート・ウェイン<sup>4)</sup> 行きの同じ列車、しかも同じ車輦に乗り合わせたのであった。ジャネヴウは、兄アーヴィンとその家族のもとで、休暇を過ごそうとしていた。そこでも、チャールズは、言葉をかけられずにいた。翌朝、兄の家の前庭にジャネヴウが居る時、偶然、馬に乗ったチャールズが通りかかった。その時、言葉を交わすことは無かったが、確かに、二人の視線は絡み合ったと、ジャネットは記している。〈48〉<sup>5)</sup>

兄の許から、コーラの家へと、休暇の場を移したジャネヴウに、チャールズから第一通目の手紙が届く。その手紙の中で、彼は、7月26日～29日のローム・シティでの集会で彼女の姿を認めたこと、汽車で乗り合わせたこと、自分の職業、自分の素性について、ジャネヴウの側から問い合わせが可能な自分の係累についてを語り、文通をしてほしいと願い出た。彼の手紙の日付から、十日後の日付の彼女の手紙には、羊歯や葦を、御婦人方にとってあげているチャールズの姿を見たことがあって、それが、大層羨ましかったこと、彼の係累について、既に幾つかの話を耳にしたこと、自分の父親のこと、亡くなった母を、父がいかに大切にしていたか、そして、その思い出をいかに慈しんでいるかを語った。翌年の夏、二人が再会するまでの文通で、ジャネヴウは、物心ついてからの初めての民主党大統領クリーヴランド (Grover Cleveland, 在任 1885～89) への大きな不安を語り、不得手な家事については、初めて「食べられ

る」レモン・パイと、ギンガム・チェックのエプロンを作ったというエピソードを披露する。12ページにもわたる手紙を書きつつも、文通だけでは分かり合えない不安を訴えてもみる。又、人間にとっての真の悪とは、公正でないこと、放蕩、深酒の三つであると主張する。その生き生きとした描写や語り口は、チャールズだけでなく、彼の回りの人々をも魅了するものであった。

チャールズの風貌については、余り伝わってきていない。僅かの記述の中から拾ってみると、彼の写真を見て、ジャネヴウは、こんなにぱりっとした人物だと思わなかったと告げていた。峠谷に沿った髪が生え際、目、眉は、ただただ美しく、殊に、額は、父親マークと同じくらいに見事だと感じていた。古典的な鼻、そして、小振りな口。気に入らないのは、怒りと不機嫌を想起させる顎だと述べている。

1885年夏、ローム・シティで再会したジャネヴウとチャールズの間には、ロマンスが燃え上がり、育っていった。チャールズは、ジャネヴウの姉フローレンスの家を訪れたり、ジャネヴウと共にボートに乗って、短い夏の休暇を過ごした。秋から冬にかけて、チャールズは、ウォバッシュ<sup>6)</sup> までジャネヴウを訪ねてくる「恋人」の間柄となった。この頃、ジャネヴウは、名前をジーンと変えた。チャールズからの正式の求婚を心待ちにしている間、彼女は「ジーン」と彼に呼ばれると、とても嬉しそうだったという。ジャネヴウ自身、この「ジーン」という名前を非常に気に

- 
- 4) インディアナ州アレン・カウンティ (Allen County) にある州北東部の都市、Maumee Riverの水源に位置する。1794年アンソニー・ウェイン將軍 (General Anthony Wayne) が砦を築いたのに始まる。General Electric, International Harvester, Magnavox, Goodrich Tire and Rubber等の工場がある。インディアナ北部の湖畔地域の出入口 (the Gate Way to the Northern Indiana Lake Region) である。アメリカ中北部の産業と農業の中心 (the Hub of the Great North-Central Industrial and Agricultural America), 又頂上の町 (the Summit City) と言われる。アーク灯を用いて1883年に野球のナイト・ゲームを初めて行った都市であると主張している。
- 5) Jeanette Porter Meehan, *Lady of the Limberlost* (1927; rpt. New York. Amereon House, 1972), p. 48. 本章のG. E. ポーターに関連する事項は、全て、この本に拠る。又この第II章中の〈 〉付数字は、この本のページを表している。訳は、全て、筆者である。
- 6) インディアナ州北部のウォバッシュ・カウンティ (Wabash County) の都市。ウォバッシュ川 (Wabash River) 沿岸に位置し、石の街 (the Rock City) と言われる。1879年4月にブラッシュ・アーク灯システム (Brush arclight system) で全市に電灯がついた。地名は川の名にちみ、白川の意味。フォート・ウェインからは、西に約40マイル離れており現在でも、ノーフォーク・アンド・ウェスタン (Norfolk and Western) 鉄道で結ばれている。

入っていたし、家族みんなが、この名前を認めてくれて、この名で呼んでくれるように強く希望した。名前といえば、チャールズの方は、手紙の中で、ジーンがいつまでも自分のことを、「ミスタア・ポーター」と書く点に苦情を申し立て、二人の間で、小さな諍いが起きたりもした。この時、ジーンは、友人が彼を呼ぶように「チャーリー」と呼ばないのは、彼に対して抱いている敬意と淑徳、そして、冷ややかな青い瞳に感じざるをえない僅かばかりの畏敬の念のためだと語る。

さて、このように甘い恋人関係の時代を送る二人であったが、ジーンは、当時の女性に求められた役割に、疑問を投げ掛けていた。1885年9月18日付けのチャールズに宛てた手紙に、ジーンは次のように記している。まず、

貞節で魅力的な妻は、男性の名誉と清廉にとっての、最も優れた保護者になると思いますし、男性にとっての当然の権利であり、又、ふさわしい休息場所というのは、居心地よく楽しい家庭であると考えます。(60-61)

と、男性を中心とし、男性(夫)のために存在する家庭の意義を認めてはいる。しかし、

そして、このような家庭のため、(家庭という)祭壇を維持するための犠牲的な煌めきとなる女性達も居るのです。私は、女性の権利を声高に叫んだり、擁護したりする喧し屋ではありません。しかし、十人のうち九人までの若い女性が、このような家庭を築こうと奮闘して、身体をこわしてしまっているのです。若い女性に、家庭の管理と設計という重荷を背負わせ、料理・洗濯・パン焼き・アイロンがけ・ベッドメイキング・水回りや台所、部屋、窓をこまめに磨き上げ、埃を払いといった清掃を全てさせる。その上、彼女は、いつも、朗らかで陽気でないとはならないなんて！ 小言を言いたくなるのも当然な筈なのに、一年間の婚約期間を経た女性と、一年間の結婚生活を経た女性との間のあまりの落差に、私は、男性にとっての、婚約者に対する愛情と、結婚した相手に対する愛情との違いについて、あれこれ考えてしまうのです。(61)

というように、女性が一方的な負担を負わね

ばならない結婚生活に、否定的な意見を述べている。

ここで、当時のアメリカの女性達の動向を見ておかねばならないだろう。19世紀後半へ至るまでの、アメリカ白人女性達の辿った道程を概観してみると、次のようになる。

まず、植民地時代の女性のあるべき姿はどうであったか。この時代、労働力たる人手は圧倒的に不足していた。そのため、男女間の分業は、さして、厳密にはなされず、女性でも出来る仕事には、全て、手を染めざるを得ない状況にあったと言える。この時代の女性の仕事を具体的に見てみると、

女性たちに課せられた家事は重要な仕事であったが単調で、つらく骨の折れる、しかも満足感の得難いものであった。炊事、洗濯の他、バター、チーズ、りんご酒、乾燥果物などの保存食品作り、ろうそく作り、葉草集め、糸紡ぎ、機織り、家畜の世話、野菜作りなど女性の仕事は限りがなかった。さらに、男と共に畑を耕したり、狩猟を手伝うこともあった。<sup>7)</sup>

とされている。おそらく、家庭内の仕事は、植民地で生きる人間にとっては、不可欠のものであっただろうが、それをこなしているからという理由で、女性が尊敬されたり、価値がある者だとは認められなかったであろう。

次に、独立革命前後の女性達として、18世紀後半の姿をみってみる。この時期は、女性の存在に国家的なイデオロギーが付加された時代である。革命とは言われるが、これは、まさに一つの「戦争」であった。戦争状態にある国家では、いつの時代でも「銃後の母」の存在が強調されるのではないか。曰く、「共和国を守る母」「共和国市民を育てる母」であると…。革命勃発前、女性は、イギリス製品(織物や茶を含む)の不買運動を展開し、運動の中心の担い手となることで、国家を意識している事を公けにした。そして、革命を通して確固たるものとなった。人民主権の「共和国思想」は、アメリカ女性に、特別の役割を与えたのであった。「有徳の、信仰心

7) 有賀夏紀・著『アメリカ・フェミニズムの社会史』(1988; rpt. 東京・勁草書房, 1991) p. 8.

篤い、教育のある、また機会均等の中で経済競争にも打ち勝っていく市民を育てる」<sup>8)</sup>の、「共和国の母」の役割である。単に、自分の子供を育てるという「私」の役割ではなく、国家を支える人物を育成するという「公」の役割が定着するようになるのである。女性達が、家庭内でなすべき仕事は、革命前と、何ら違いは無い。しかし、その仕事に、国家的な意義が与えられたのである。

19世紀前半のアメリカは、農業生産国から工業生産国への過渡期にあった。独立革命直後の1780年代から変動の兆しが現われ、特に1830年代は、産業革命の下、社会的にも、経済的にも大きな変革に見舞われた時代であった。それまでは、主として農業を営む場であった家庭が、その農業生産の役割を失い、その代わりに、男性(夫)は、外部の工場での生産活動に従事し、女性は、家庭内での細々とした仕事を行い、家庭を守るという性による分業が進み、定着した時期だと言える。そして、性差による分業が進んだのと同時に、女性の間での階級差も拡大していった。産業革命により、様々な機械が生産され、女性は、もはや家で糸を紡ぐ必要はなくなったし、食料品や、日常生活に必要な品々も商品として売買されるようになった。このため、中産階級の女性は、産業革命前ほどには、家事や育児に時間を費やす必要はなくなり、自由な時間＝余暇を持てるようになった。逆に、下層階級の女性達は、農場から離れ、工場労働者となり、辛酸を舐めざるを得ない状況に追いやられたのであった。社会改革運動や、奴隷制廃止運動に積極的に参加する裕福な女性が存在する一方で、僅かな賃上げのために、命懸けでストライキに参加する労働階級の女性も居たのである。1825年、女性が、初めて自分たちで打ったストライキとして、

ニューヨークのお針子組合の賃上げ要求ストライキがあり、次には1828年、ニューハンプシャー州ドーヴァー、エクセターのストライキがあった。<sup>9)</sup>1828年12月、ドーヴァーの四百人の女性労働者は、雇用者側の10%賃金カットの目論みを打ち砕き、日に10時間労働を勝ち取るために、職場を放棄した。さらに、1833年には、八百人の女性職工が職場を放棄した。このストライキは、マサチューセッツ州ロウウェルにも伝播し、1834年二千人を超える織物工場の女工が、街を練り歩き集会を開いたと記録されている。<sup>10)</sup>

19世紀後半は、女性の参政権をめぐる動きが注目される時代と言えるのではないだろうか。南北戦争終結まで、奴隷解放運動と同歩調をとってきた婦人参政権運動の支持者が、戦争終結後、分裂した。憲法修正第14・15条の可決により、黒人男性への参政権が認められたためである。この結果、白人女性には、従前どおり、参政権が認められない状態が続くことになった。1867年7月、フィラデルフィアでのアメリカ建国百年祭で、全国女性参政権協会のスーザン・アンソニーは、女性の権利宣言を読み上げた。それは、「合衆国百年の歴史が力による女性への圧政であり、これは合衆国建国の基礎に真向から対立するものであること」<sup>11)</sup>を明言していた。その具体例としては、

憲法に「男性」のみの権利を明示したこと、離婚に関して女性に不利な条件を与えていること、女性に陪審員の資格を与えていないこと、したがって女性は不当に罰せられていること、代表なしの課税、性的二重規範が罷り通っていること、この結果、女性売春婦は罰せられ、男性は無罪放免されていること<sup>12)</sup>

等が挙げられた。これ等は、イギリスヴィクトリア朝時代の女性が足枷としてはめられていた物と、殆ど同様であり、イギリスから自

8) 有賀著、前掲書、p. 24.

9) ハワード・ジン著(猿谷要・監修、平野孝・訳)『民衆のアメリカ史[中]』(東京・TBSブリタニカ、1982)、p. 383.

10) Anthony Bimba, *The History of the American Working Class* (New York: Greenwood Press, 1968), p. 99.

11) 栗原涼子・著『アメリカの女性参政権運動史』(東京、武蔵野書房、1993)、p. 108.

12) 栗原著、前掲書、pp. 108-109.

由と平等を求めて移住してきたピルグリム・ファザーズの子孫達にとっては、納得出来る状態ではなかった。このため、女性が自らの権利を求めて、演壇に立ち、集会を開き、自分たちの意見を公けにする場を設けていった。1900年までに女性参政権を承認した州は、1869年のワイオミング準州、1870年ユタ州（但し、1887年に一夫多妻制を禁止するエドマンズ・タッカー・アクトにより、女性参政権は撤廃。再承認されたのは、1896年である。）1893年コロラド州、1896年アイダホ州の僅か四州にすぎなかった。しかし、教育機関に関する等の限定的参政権だけにしても、獲得に至るまでには、大いなる努力を払わねばならず、その中で、女性の意識は目醒め、高められていった。

この女性参政権を廻る運動の他に、女性労働者を含む労働争議の展開も注目せねばならないだろう。この時期には、全国的な労働者組合が組織された。1869年、全国規模の女性だけの労働者団体である「セント・クリスピンの娘たち」(The daughters of St. Crispin) が結成された。マサチューセッツ州フォール・リバーでは、賃金カットに対抗して、殆ど女性だけが組合員の「織工保護連合」(Weavers' Protective Association) が結成され、翌1875年には、連合は三万台の織機を止めるという大ストライキを打った。これは、八週間程続いたが、生死に係わるようなひどい飢餓のため、「黄犬 (yellow dog)」契約と呼ばれる屈辱的で、今後の労働活動への死命を制する契約に署名をせざるをえなかった。<sup>13)</sup> この前後にわたる1870年代の不況は、多くの労働運動へと、下層階級の女性を取り込んでいった。

この時代、富裕な階級の女性達は、さらに裕福になり、中産階級の女性で、教育を受けた者は、女性の権利獲得運動に目醒め、労働者階級の女性は、生きるために労働運動に身を投じるといふ具合に、女性の分化が一層進

んだと言えるのではないだろうか。

このような流れの中に置かれたアメリカの一女性として、ジーンが、妻の役割に疑問を投げ掛けたという姿勢は、決して先鋭的なものとは思われない。だが、敬慕してやまなかった母親メアリーが、日々繰り返したに違いない仕事で、女性の一面を損なうかもしれないと考えたのは事実である。ジーンの、このような意志が、後の作品で描かれる女性達を、生き生きとさせ、彼女たちに、自分の人生は自分で切り開く強さと力を与えていたのではないかと思う。

1886年1月、ジーンとチャールズの間で、愛情を確認するやりとりがなされた。チャールズから、どんな内容の手紙が来たのかは定かではないが、どうやらそれは、ジーンが自分に対して、どんな感情を抱いてくれているのか自信がなくなったことを、又、彼女にとって自分が相応しい人間だとは思われないという気持ちを告げるようなものだったと推測される。ジーンは、その手紙に即座に返事を出し、それは次のようなものであった。

あなたの腕に身を投じるため、もう足を踏み出したのだと、私が感じられるようにしてください。…私が、あなたに、愛していると告げたら、それは、私の本当の気持ちだと信じていただけないのでしょうか。そのように言葉に出したことが、私にとって、どういう意味を持っているのか、理解していただけないのでしょうか。…1年半前、私の人生に一人の男性が登場しました。私が受け取った最初の手紙は率直で高潔なもので、十分に信頼に値するものでした。少しずつ、(手紙の)一行毎に、(手紙で語られる)教えを学ぶ毎に、そういった思いは確信に変わりました。その思いを疑うことはありませんでしたし、その確信が揺らぐこともありませんでした。…愛の暁の光が、生命の朝に射し込みました。そして、私の青春、精神力、大望にも、その光は伸びてきました。人生のあらゆる道程に、清新でいて、断固とし、情熱的な想いである初恋が、押し寄せて来たのです。(67)

1月20日付けのジーンの手紙には、ためらいの無い愛情が発露されていた。この手紙に対するチャールズの返信は、ジーンの心をしつかりと掴んだようである。2月3日付

13) Bimba, *The History of the American Working Class*, pp. 156-157.

けのジーンの手紙は、書き出しが、今までの堅苦しい「ミスタア・ポーター」から「愛しいあなたへ (Dear Love)」と変わっている。この後、二人は順調に結婚への道を進んだ。

4月16日、結婚前にジーンがチャールズに宛てた最後の手紙には、幸福でたまらない恋人たちの様子が溢れている。

一日のうち殆ど全部と言っていい位の時間、あなたのことを考えています。…あなたに宛てた手紙の中で一番素敵な手紙になるように書きたいのですが、どうしたものか、言葉は、私をすり抜けて行ってしまいます。手紙を書くのに使える時間は、僅かに数分しかありませんし、今までこんなにもへとへとになった経験もありません。でも、私は、今夜、本当に幸せです。何かしら真情に満ちた、意味深い言葉を使って、私の心から溢れ出ていく愛の流れを書き留められればと願っています。そして、白い便箋の上に、今夜、至福の深紅の薔薇の蕾を描き、花開かせることが出来れば良いのですが。〈71〉

という出だしで始まっている。そして、この先共に歩む人生に思いを馳せ、新生活への不安を語り、今夜、チャールズが傍に居てくれることを望み、姪からの伝言も伝え、二人の新居へ送った荷物についての指示もしている。短時間に書かれた手紙とは思えないほど、愛情と才気とユーモアに満ちたものであった。

チャールズは、4月18日付けの手紙で、「君は家のことを申し分なくやれる、何故なら僕が手伝うし、焦る必要なんか無いからだ」〈73〉と、ジーンの新生活への不安を打ち消す言葉を記している。さらに、「僕の腕のなかで、安心して身を休めれば良い、泣きたい時には、少し泣けば良い、君の涙は、僕がキスで拭い取ってあげよう、そうすれば、きっと気分が良くなるから。」〈74〉と優しい言葉を連ねている。

二人のこの手紙のやりとりから、ジーンとチャールズの関係が、深い愛情と理解の上に成り立っていることが、感じ取られる。チャー

ルズは、男性としては、積極的に家庭の問題に取り組む姿勢を見せているし、ジーンは、以前に書いた手紙には見られない家事への意欲を示していた。この良き家庭人であろうとするチャールズの生き方——家事を全て妻の責任としない——が、後にジーンが作家として立っていく基盤を生み出したと考えられる。そして、三日後、二人は結婚式を迎える。

### (3) 結婚の日

1886年4月21日水曜日、インディアナ州ウォバッシュのヒル・ストリート112番地にあるエイダの家で、チャールズとジーンとの結婚式とその披露宴が行われた。これに先立つ案内状は、当時の習慣により、ジーン、チャールズ其々の名により2通が発送されたのであった(1通の招待状に連記するのは、一般的ではなかった)。

ジーンは、結婚式の衣装をフォート・ウェインのアーヴィンの家に数日間滞在して調達してきた。その衣装類は、当時としては、可成のものであった。当時のパリ・モードと共通する部分が認められ、ジーンがファッションに関心を持っていたことと、同時に、その関心を現実のものとしてやれるだけの財産と愛情を、父親マークがジーンに対して抱いていたことが窺える。

まず、ウエディング・ドレスであるが、当時のこの地方の慣習に従い、白を基調とした衣装ではなかった。それは、鶉色の絹と、小さな一斤染(ベビーピンク)の薔薇の蕾と、苔色の葉を飾り模様に錦織りにした東雲色のタフタを組合せたものだった。錦織りにしたタフタを用いたのは、花嫁が纏うガウンの前面の縫い飾り、両脇のパニエ<sup>14)</sup>の部分、そして、長袖の肩の部分のパフ(ふくらみ)の箇所であった。このガウンの下には、フロック(上下続きのドレス)を身に付け、それは、

14) pannier. 特に18世紀、女性がドレスのスカート部分をふくらませるため、ウエストからぶら下げた籠。葦、柳、紐、鯨の髭等の素材で作られており、籠状にリボンで組み立てられていた。イギリスでは、フープ・スカートの名で呼ばれた。

鳥の子色のアンダー・ドレスで、非常に薄いレースで縁取られていた。背中の方へ引き寄せられたオーバー・スカートは、無地の薔薇色の絹で仕立てられており、腰の部分でたっぷりとした襷を取っており、そのまま真直ぐに臍の位置まで流れ、何箇所かで摘み上げられて、そこから下は、優美で緩やかなドレープを作っていた。

ウェディング・ドレスに添える小物としては、白い手袋、白い靴下、そして当時の慣習からはずれた白い上靴。ヴェールは、教会での結婚式でもかぶらないという習慣に従い、身には着けなかった。ヴェールの代わりに、ジーンは白い絹の扇を手にして、結婚式に臨んだ。この扇は、彫刻を施した象牙の柄がついたもので、扇面には、薔薇の蕾と勿忘草が手描きでなされていた。

このように、ジーンの花嫁衣装の描写を細かく見てみると、彼女のイメージした姿は、ピンクの薔薇であったと想像される。

イギリスでも、花嫁に関連する花としては、オレンジの馨しい白い花と、薔薇が、最も一般的である。オレンジの木は、常緑樹であり、花卉が純白であり、花と実を一緒につけることから、純潔・豊穰・結婚の象徴であるとされてきた。結婚式では、花嫁の花冠に一番よく使われ、結婚式後には、ブライズ・メイド(新婦に付き添う娘)達に投げられる花である。この習慣は、十字軍時代に東方から伝わり、サラセン族の慣習だったと言われている。フランスからイギリスへ、この習慣が入ったのは、1820～30年頃と推定されている。(この習慣が伝えられる以前は、イギリスでは、薔薇が、花嫁を飾るのにふさわしい花とされていた。)1849年12月と1851年1月にトゥードゥーズ (Adele Anais Toudouze) が発表したファッション画には白薔薇を髪飾りにし

た花嫁の姿が描かれている。<sup>15)</sup> 1872年5月、パリで発行された服飾雑誌のイラストにある、同じ画家によって描かれた花嫁は、二人とも、髪に白いオレンジの花を挿している。<sup>16)</sup> 現代のイギリスの薔薇について、出口保夫氏は、「六月はたしかに美しいバラの咲く季節であるから、教会の結婚式なども、バラの花で飾るのに都合がよいし、そんな色とりどりのバラの花の中にうずまっていると、たしかに人は幸せな気分を満たされる。<sup>17)</sup>」と書いておられる。現代でも、薔薇とオレンジの花は、結婚式に欠かせない花だといえる。

この欧州で花嫁を彩る花として主流であった薔薇とオレンジの中から、ジーンは、自分を飾る花として薔薇を選んだ。これは、花の姿もさることながら、ジーンが親しんできた古典文学作品の中にふんだんに描写された花だったこともあったのではないだろうか。ギリシア神話では、愛・美・豊穰の女神アフロディテが、海の泡から誕生した時、一番先に咲いたとされるのが、この薔薇である。そのため、愛と喜びと美と純潔を象徴する花と考えられ、これが、花嫁が結婚式で薔薇の花束を持つ風習につながった。さらにギリシア神話中、薔薇は、学問・芸術を司る女神ミューズ達に捧げられているし、愛と恋愛詩を生み出す靈感を与える葡萄酒の神ディオニュソスにも捧げられている。この時、薔薇は、豊作を表し、葡萄酒や愛、歌、春、若さを表すとも言われている。一般的には、詩を生み出す灵感の源となると考えられる。また、ダンテ (Dante Alighieri, 1265～1321) が『神曲・天国編』(Divina Commedia, 1307-21) の第31・32歌で描いた純白の薔薇の形は、被創造物である宇宙の神秘そのものを形成しており、その花芯には、宇宙の女王たる聖母マリアが座していると描かれている。<sup>18)</sup> そ

15) 石山彰・編『ファッション・プレート全集Ⅲ 19世紀中期』(東京、文化出版局、1983)、プレート・ナンバー 24、25。

16) 石山彰・編『ファッション・プレート全集Ⅳ 19世紀後期』(東京、文化出版局、1983)、プレート・ナンバー 6。

17) 出口保夫・著『イギリス四季暦春・夏』(東京、東京書籍、1988)、p. 80。

18) ダンテ・著 (寿岳文章・訳)『集英社ギャラリー [世界の文学] 1・古典文学集』中の『神曲』(東京、集英社、1990)、pp. 758-770。

のため、聖母マリアとその純潔を表す花として、百合と同時に薔薇の花が挙げられる。チョーサー (Geoffrey Chaucer, 1340?~1400) は、『バラ物語』(*The Romaunt of the Rose*, 1360-65) という部分訳詩中で、薔薇の蕾に恋する若者を登場させ、薔薇を(宮廷風)恋愛の象徴として用いた。又、シェークスピア (William Shakespeare, 1564~1616) の『ロミオとジュリエット』(*Romeo and Juliet*, 1594-95) 中の「名前に何があるというのだろう、薔薇と呼ばれるあの花は、どんな名前と呼ばれようとも、薫りに変わりはない筈だ」<sup>19)</sup> という台詞は、余りにも有名であり、美花の代表としての扱いを受けている。スペンサー (Edmund Spenser, 1552-99) やシェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) といった詩人は、薔薇を知性美の象徴として用いた。このように文学作品の中に散りばめられ、歌われた薔薇の花言葉は、愛、色によって、さらに、白薔薇では「純潔・処女性・抽象的思考・沈黙」、白薔薇の蕾には「恋をするにはまだ若すぎる、秘密」、紅薔薇では「熱情、殉教、楽園の花、天上の喜び、称賛、願望、驚嘆、赤面、戸惑い、恥じらい、結婚、母性」を、鴉色の薔薇は「愛を待つ」、黄色の薔薇は、「不実、裏切り、嫉妬」、青い薔薇は「不可能なこと」を、そして黄金の薔薇は「完遂・ローマ教会」を表象するとされている。そして、この花は、イギリス国花であり、また、アメリカ合衆国ニューヨーク州の州花にもなっている。

ジーンより半世紀程前の作家であるオルコット (Louisa May Alcott, 1832~1888) は、その家庭小説の代表作『若草物語』(*Little Women*, 1868) 中で、心の慰めとなる薔薇を描いた。特に、長女メグ (通称 Meg,

Margaret が本名) が、他家に滞在中、貧しさ故に惨めな思いをしている時、ローリー (Laurie) から届けられた薔薇と羊歯の花束は彼女に心の平安をもたらしてくれた。<sup>20)</sup> ジーンと同時代の作家モンゴメリー (Lucy Maud Montgomery, 1874~1942) が描いた赤毛のアンことアン・シャーリー (Anne Shirley) の腹心の友であるダイアナ・バリー (Diana Barry) が結婚式にブーケとして持つのは、白いリボンで束ねたピンクの薔薇であった。この時アンは、ピンクの薔薇のことを「愛と信頼の花」<sup>21)</sup> だと語っている。「赤毛のアン」シリーズ中のアンは、ジーンが結婚したこの1886年には二十歳という設定であり、ダイアナの結婚は、1887年の出来事とされている。そして、アン自身が、1891年に結婚する時も「靄のようなヴェールと、腕いっぱい抱えた(遅咲きの)薔薇」<sup>22)</sup> で飾られた花嫁となった。ウェブスター (Alice Jean Webster, 1876~1916) の『あしながおじさん』(*Dadday-Long-Legs*, 1912) では、主人公ジェルーシャ・アボット (Jerusha Abbott) が、おたふく風邪で病棟に収容されていた時、あしながおじさんから、お見舞いに届けられたのが、ピンクの薔薇の蕾だった。<sup>23)</sup> 又、大学を卒業する晴れの日にも、薔薇の蕾が、お祝いとして送られた。<sup>24)</sup> また、ジーンは、自らの作品でも、高校卒業式の日、クラスの代表となったエルノラ (Elnora Comstock) のドレスや結い上げた髪を飾る品として、二、三枚緑の葉のついた白い薔薇を四輪用いている。<sup>25)</sup> このように、ほぼ時代を同じにする少女小説の作品中にも「ここぞ」という時には必ず薔薇の花が描かれている。それだけ、女性にとって、薔薇は大切で重要な花であった。

19) *Romeo and Juliet*, II, ii, 43-44.

20) Louisa May Alcott, *Little Women* (1868; rpt. Harmondsworth: Puffin Books, 1976), p. 126.

21) Lucy Maud Montgomery, *Anne of the Island* (1925; rpt. Harmondsworth: Puffin Books, 1981), p. 217.

22) Lucy Maud Montgomery, *Anne's House of Dreams* (1926; rpt. London: Puffin Books, 1988), p. 34.

23) Jean Webster, *Daddy-Long-Legs* (1912; rpt. New York: Puffin Books, 1989), p. 50.

24) *Ibid.*, p. 173.

25) Gene Stratton Porter, *A Girl of the Limberlost* (1909; rpt. New York: Amereon House, ———), p. 211.

花の女王とされる薔薇を、自分の花として選んだのは、ジーンが、如何に古来からの文学作品に親しみ、その美を愛してきたかを示すものである。さらに、この後、自然と深い関わりを持つ博物誌や小説を発表していくジーン自身が、自然の美中の美を象徴する姿を模したとも考えられる。

さて、ここで、ジーンの結婚式当日の衣装に戻ろう。この日、モーニング・ガウンとして、ジーンが着たのは、絹で裏打ちを施したサーモン・ピンクのカシミア地で作られたものだった。身体の前面部には、首から足元にまで、レースの縁取りをした縫い飾りがついていて、背中と脇の部分は、身体にぴったりとフィットしており、腰から裾にかけては、品の良いフレアが広がっていた。

披露宴後の出発用のドレスは、当時「フランス婦人の布」と呼ばれた高級生地で作られていた。色は、暗青緑色（孔雀青色）で、金緑の色味を帯びた青色に、とても素晴らしい陰影が醸し出されているものだった。きつちりとしたバスク<sup>26)</sup>、オーバー・スカート、普通のドレス・スカートから成るスーツでの形に仕上げられていた。パリで、スーツの形の婦人用ドレスが紹介され始めたのが、1880年頃からであるので、アメリカでは、流行の先端をいくタイプの服装であったと想像される。このスーツには、黒玉ビーズと、やはり、黒のトリミング用飾り布の絹地で、縁取りがされていた。

外套も、同じ布地と飾りを用いていたが、ケープとドルマン袖の両方をミックスさせたようなデザインで、「マントル」と命名された様式のものだった。背の部分を交差させたり、ドレーブを打たせたりして、両腕をすっぽり履い、指先までも隠すような作りであった。

帽子の色は、ドレスの色と合わせてあり、

長くて黒い駝鳥の羽根飾りがつけてあった。

ジーンとチャールズの結婚式にキスのエピソードがある。当時、この地方の結婚式では、牧師の祈禱の最後の「アーメン」が済むと、花婿の前に、あらかじめ決められていた少年が、花嫁に祝福のキスをする習慣があった。ところが、この二人は、「アーメン」が言われるや否や、ジーンの持っていた扇の蔭でキスを交わしてしまったという。牧師は驚きのあまりに、会衆に向けて、二人の結婚を宣言するのを忘れてしまったほどだった。

披露宴後、新婚の二人はディケーター<sup>27)</sup>へ向けて、フォート・ウェイン、ディケーターから祝福に駆け付けてくれた親戚・友人と共に出発した。ディケーターでは、昔からのポーター家の家屋が、調度を整えられ、内装を新しくされて、花嫁の到来を待ちわびていた。ここで、ジーンは、母親メアリーが亡くなってから、初めて「家庭」というものを持つことになる。おそらく、ジーンにとって、これまで唯一の自分の家庭とは、母がまだ存命中だった頃暮らしていたホープウェル農場だったのではないかと思われる。林檎の果樹園と、乾草の匂いの溢れる農園に囲まれて暮らしていた幼い頃、父親と母親と姉と共々生きていた場こそが、彼女にとっての家庭であったのではないか。その後、大好きな長兄も、愛して止まなかった母親も死んでしまい、ホープウェル農場を離れ、街中で暮らすことになった。ジーンは、自然の中でこそ、その生を満喫するタイプの人間であったから、街中での生活は、本性のものではなかった筈だ。さらに、殆どの期間、結婚した姉とその夫や子供と共同の生活を強いられていたのだから、自分の「家庭」という印象を抱けなかったのではないだろうか。ジーンの家へへの思慕の念は、たとえば『そばかす』の中の、主人公「そばかすの少年」が、ダンカン

26) basque. バスク・ボディのこと。常にスカートと切り離して仕立てられ、タイトに紐締めにしたコルセットの上に着用した。鯨髭が入っており、ぴったりした作りになっている。

27) インディアナ州アダムス・カウンティ (Adams County) にある町。フォート・ウェインから南南東に約 25 マイル程のところにある。

の家庭に寄せる深い愛情と憧憬によって、また、『リンバロストの乙女』の中では、何とか母親の理解と愛情を勝ち取って、心暖まる家庭生活を送りたいと願うエレノアの姿に象徴されている。ジーンにとって、結婚とは、夫と妻という一つの単位で、新しい「家庭」を、自分の裁量で作りに上げることを意味していたように思われる。だからこそ、新婚生活に対しては、期待と同時に不安も大きかったようである。そうした中で、ディケーターでの、二人の生活が始まった。

【つづく】

## 書 誌

## Primary Sources

Meehan, Jeanette Porter. *Lady of the Limberlost: The Life and Letters of Gene Stratton Porter*. 1927; rpt. New York: Amereon House, 1972.

Porter, Gene Stratton. *Freckles*. ; rpt. New York: Aeonian Press, 1977.

----- . *A Girl of the Limberlost*. 1909; rpt. New York: Amereon House, ----- .

## Secondary Sources

## 洋 書

Abrams, Mayor Howard. *The Norton Anthology of English Literature (Fourth Edition) volume 1*. 1962; rpt. New York: W. W. Norton & Company Inc., 1979.

Alcott, Lousa May. *Little Women*. 1868; rpt. Harmondsworth. Puffin Books, 1976.

Binba, Anthony. *The History of the American Working Class*. New York: Greenwood Press, 1968.

Montgomery, Lucy Maud. *Anne of the Island*. 1925; rpt. Harmondsworth. Puffin Books, 1981.

----- . *Anne's House of Dreams*. 1926; rpt. London. Puffin Books, 1988.

Shakespeare, William. Craig, W. J. ed. *Shakespeare Complete Works*. 1905; rpt. Oxford. Oxford University Press, 1978.

Webster, Alice Jean. *Daddy-Long-Legs*. 1912; rpt. New York. Puffin Books, 1989.

*The Times Atlas of the World (Comprehensive Edition)*. 1967; rpt. London. Times Books, 1994.

## 和 書

有賀貞, 他・編 『アメリカ史 2・1877年-1992年』 東京・山川出版社, 1993.

有賀夏紀・著 『アメリカ・フェミニズムの歴史』 1988; 東京・勁草書房, 1991.

石山彰・編 『ファッション・プレート全集 19世紀中期』 東京・文化出版局, 1983.

----- 『ファッション・プレート全集 19世紀後期』 東京・文化出版局, 1983.

ウィルコックス (Wilcox, R. Turner)・著 (石山彰・訳) 『モードの歴史——古代オリエントから現代まで—— (*The Mode in Cosutume*)』 1979; 東京・文化出版局, 1982.

カーチ (Curti, Merle)・著 (龍口直太郎, 他・訳) 『アメリカ社会文化史・下巻 (*The Growth of American Thought*)』 1958; 東京・法政大学出版局, 1969.

栗原涼子・著 『アメリカの女性参政権運動史』 東京・武蔵野書房, 1993.

サンローラン (Saint-Laurent, Cecile)・著 (深井晃子・訳) 『女の下着の歴史 (*L'Histoire Imprevue de Dessous Feminins*)』 東京・文化出版局, 1981.

清水克祐・著 『アメリカ州別文化事典』 東京・名著普及会, 1986.

ジン (Zinn, Howard)・著 (猿谷要・監修, 平野孝・訳) 『民衆のアメリカ史 [中] (*A People's History of The United States*)』 東京・TBSブリタニカ, 1982.

ダンテ (Alighieri, Dante) 著 (寿岳文章・訳) 『神曲 (*Divina Commedia*) (集英社ギャラリー [世界の文学 1]・古典文学集)』 東京・集英社, 1990.

出口保夫・著 『イギリス四季暦／春・夏』 東京・東京書籍, 1988.

成田成寿・編 『英語歳時記 (普及版)』 東京・研究社出版, 1978.

ヴリーズ (Vries, Ad de)・著 (山下圭一郎, 他・訳) 『イメージ・シンボル事典 (*Dictionary of Symbols and Imagery*)』 1984; 東京・大修館, 1985.

『ブリタニカ国際地図』 1971; 東京・TBSブリタニカ, 1991.